

技術教育研究会と私の歩み

③

佐々木 享

日教組が主催する教育研究全国集會に参加

同じ1960年1月には、私は、日教組が主催する教育研究全国集會の第9次全国集會(於千葉)に、前年秋の東京都教連の教研集會から選ばれた正會員として参加した(正確にいうと、この年の集會から日高教との合同集會となった)。もちろん、教研の全国集會へは初参加だった。東京都教連の教研集會に提出された原正敏先生の報告書は重要な内容を含んでいると思われたので、千葉の教研集會へ提出した私の報告書には、都教連の事務局に無理を言って、同先生の報告書全文を「資料」の名目で掲載した。(この原正敏氏の報告は、当時『教育』編集部にいた大沢勝氏＝現日本福祉大学学長の目にとまり、1960年2月号に「職業訓練法と学校教育」と題して掲載された。)

難題が多かった日教組の 教育研究全国集會の千葉集會

この1960年の教研集會の生産技術教育の分科會は、種々の意味でたいへんだった。私たちは、「職業・家庭」から「技術・家庭」への移行を目前にしていた。職業科の教師には農業専攻の人が非常に多かったので、工業が中心となるこの移行に不安を抱く人や反対する人が多く、日教組が新学習指導要領反対という方針を出していたことも関係して、討論は困難をきわめ、むしろ「混乱」というべき状況だった。講師の福島要一氏が議事を進行

させるのに大変苦心されていたことが印象的だった。もっとも福島要一氏がこの年の『日本の教育』に書いているところによると、前年の集會での混乱はこの第9次集會よりもひどかったらしい。全国の教育現場の状況(の一端)を垣間見て、改めて技術教育研究の難しさを知らされたといえる。とは言っても、全国集會だから、多様な報告があり、教育現場にはさまざまな問題があることも教えられた。私の「技術・職業教育」への関心は、こんな具合に、ある意味ではひたすら教育現場の要求に根ざして始まったので、系統的・体系的なものではなかった。しかし、徒に状況に押し流されるのではなく、原理的な問題の探求を怠ってはならないことを福島要一氏から教えられたことは、重要な収穫だった。

工業高校の教師となる

同じ職場に働く女性(現在の妻)と結婚するつもりになったので、試験を受けて1960年4月から都立化学工業高校の教師となった。自分が高校、大学ともに夜学だったので定時制の教師になりたいと思ったが、工業化学ないし関連の学科がある5校の都立工業高校の定時制には空席はなかったので、止むなく全日制に赴任した。担当科目は、主として「化学工学」、「化学工学実験」で、担任をもってからは、自分のクラスに対する有機工業化学をも担当した。また1963年からはカリキュラム改革で新設された「製図」も担当した。この「製図」の時間の裏番組として、20人前

後の女生徒には、1960年の高校学習指導要領で必修化された「家庭一般」を開設した。ところが間もなく、工業を学ぶつもりで入学したのに「製図」を教えてくれないのは差別だ、と女生徒たちから抗議され、翌年から「家庭一般」ははみ出しの時間帯におかれることになった。

赴任したばかりの60年の夏に、都立化学工業高校を会場として高校学習指導要領(案)の工業化学関係部分の検討会が開催された。私も参加した。この会場に、当時川崎の工業高校の教師をしていた大谷良一氏(後の立命館大学教授)が、「化学工業経営」という科目を新設すべきだと主張して、草案を持ち込んだ。大谷良一氏とは学生時代に技術論や技術史のサークルで面識があったので、私も賛成した。ところが驚いたことに、この突然の提案は受け入れられ、10月に告示された高校学習指導要領にも盛り込まれた。

高校では、組合活動はせいぜい分会委員程度しかしなかったが、都立化学工業高校分会が属する都高教の第6支部は教研活動がたいへん活発で、これには熱心に参加した。ここで、両国高校の小島昌夫先生や貝川正也先生などのすぐれた教師たちの面識を得た。

初期の技術教育研究会の活動

創立の頃の技術教育研究会の活動は、原正敏氏の連載に詳しく述べられているように、ほぼ毎月の例会と、その例会での報告を伝える『技術教育研究会会報』を発行することがほぼそのすべてであった。最初の2年間ほどは、年に約12回の例会がひらかれている。当時の技教研は、まだ小さなサークルという感じの組織で、少なくとも全国団体の体裁ではなかったと言ってよい。また会員を拡大しよう、というような組織活動についての議論をした記憶もない。1961年12月に発行され

た『会報』第25号によると7200円の赤字だったとされている。

技術教育研究会の運営委員となる

この頃の『会報』の記事によると、私は1961年5月つまり創立の翌年から技術教育研究会の運営委員に加えられている。この時には原正敏氏のほか、大川圭一、齋藤健二郎、村田昭治の諸氏が一緒に運営委員となっている。大川圭一氏は都立農業高校の農業の教師、齋藤健二郎氏は東京工業大学の助手、後年に文部省の教科調査官を経て金沢大学教授となる村田昭治氏は当時はたしか蒲田方面の中学校の教師だった。しかし運営委員会はどこに集まり、どういう議論をし、どういう仕事をしていたか全く記憶がない。相変わらずに、原正敏先生の世話になっていたものと思う。

教科研の研究集会に参加する

前述したように私は、1959年の暮れに店頭で偶然に雑誌『教育』を初めて知った。研究集会のまとめとして書かれた中内敏夫氏の論文を読み、いわゆる技術論論争にも通じているらしいその水準の高さに驚いた。そしてこういう研究会があるのなら参加したいものと思った。しかしこの時期の教科研は、教育科学全国協議会と称しており、夏の研究集会は全国各地のサークル代表などと、本部が招請した研究者だけで討論していた。ところが、参加したいと思っただけで私の方からアプローチしたわけでもないのに、1960年夏の研究集会への誘いの手紙が舞い込んだ。東京郊外の御岳で開催された集会に行ってみると、原正敏先生も参加していた。私への誘いは、長谷川淳先生の紹介であったことがわかった。これを機会に私は、その後教科研の研究集会にもたびたび参加するようになった。